

報告 3

「家族教室」参加者の親子関係における情緒的側面の特徴

浜松市精神保健福祉センター 高林智子
浜松医科大学 健康社会医学講座 野田龍也

1. 目的

メンタルヘルス上の問題を抱えている子の両親について、当事者に対する親の情緒的側面について、調査票を用いて傾向を探るとともに、家族教室を運営する参考資料とする。

2. 方法

(1) 対象者

浜松市精神保健福祉センターが平成 19 年度に主催した「家族のための精神保健福祉教室」「ひきこもり家族教室」(以下、家族教室)参加者 31 名(統合失調症患者の両親 21 名、社会的ひきこもり者の両親 10 名)。

※家族教室の内容については、本冊子 14・15 ページを参照

(2) 回答

家族教室を受講した対象者に、日本文化科学社発行の「親子関係診断検査」(Family Diagnostic Test ; FDT) に自記式で回答していただき、その場で回収した。社会的ひきこもり者の両親については、教室開始時と終了時の 2 回調査を行った。データは解析の前に連結不可能匿名化を行い、プライバシーに配慮した。

FDT は、親子関係の情緒的側面を重視した検査であり、親用検査は 7 尺度 40 項目から構成されている。

各尺度が示す内容は、日本文化科学社「親子関係診断検査手引」によると、以下のとおりである。

尺度 1 「無関心」(5 項目)

親の子どもへの関心の強弱を測定する。(親が子どもの要求や主張をどの程度尊重しているか、子どものことをどの程度大切にしているか。) 高得点の人は、子どもの意見や考えなどを無視することが多く、子どもとの関わりを密接にとろうとしない傾向が強いことを示している。得点が高いほど問題であり、低いほど望ましい。

尺度 2 「養育不安」(5 項目)

親としての自信のなさを測定する。(親として失格ではないか、子どものためにどれほど力になっているのか不安だ、子どものためにどうしたらよいかわからない、という不安の強さ。) 得点が高い人は不安を強く抱いている。

尺度 3 「夫婦間不一致」(5 項目)

養育に関する夫婦間の意見の不一致度や、養育に関しての配偶者に対する互いの不満度を示す。得点が低いほうが望ましい。

尺度4「厳しいしつけ」(5項目)

しつけの厳しさの程度の尺度。50 パーセンタイルを中心として、高すぎることもなく低すぎることもないことが最も望ましい。

尺度5「達成要求」(5項目)

子どもへの過剰期待の程度を測定する尺度。(親の夢を子どもに託し、子どもの出世をひたすら期待し、そのためなら自分は多少犠牲になってもかまわない。) この期待は、ある程度であれば、子どもは親の愛情と受け取るが、強すぎると大きな圧力と感じ、逆に低すぎると親から無視され拒否されていると子どもに感じさせる要因になることもある。得点は、高すぎず低すぎず中庸が最も望ましい。

尺度6「不介入」(5項目)

子どもの行動に親が介入しない程度を測定している尺度。得点が高いと、ある意味では放任ともいえるし、またある意味では子どもを信頼しているともいえる。得点は、高すぎず低すぎず中庸が最も望ましい。

尺度7「基本的受容」(10項目)

子どもを無理なく受け入れられる程度を測定している尺度。(気持ちも分かり合える、性格も気に入っている、一緒にいて楽しい、良い子だと思う、性格がいいなど。) 得点は、高得点であるほど望ましく、低得点であるほど問題がある。

(3) 解析

回答より7つの尺度ごとの粗得点を算出し、調査票に付属した換算表によりパーセンタイル得点へと変換した。このパーセンタイル得点について基本統計量を求めるとともに、Mann-Whitney の U 検定を用いて属性の異なる2群間の得点差の有無について検討し、Wilcoxon 符号付き順位検定を用いて受講前後における得点の変化を検定した。解析にはSPSS ver15J を用いた。

3. 結果

(1) 基本属性

①対象者数について

- ・ 統合失調症の両親群 (以下 S 群※とする) ※schizophrenia
男性 10 名、女性 11 名
- ・ 社会的ひきこもり者の両親群 (以下 R 群※とする) ※reclusive
男性 3 名、女性 7 名

②対象者の基本的な傾向について

パーセンタイル得点が 50 から離れて分布している項目ほど一般集団とは異なる特徴があると言えるが、参加者全体での得点分布を見ると、「養育不安」や「不介入」の得点が高い傾向があり、逆に「厳しいしつけ」や「達成要求」、「基本的受容」については得点が低い傾向がみられた (図 1)。

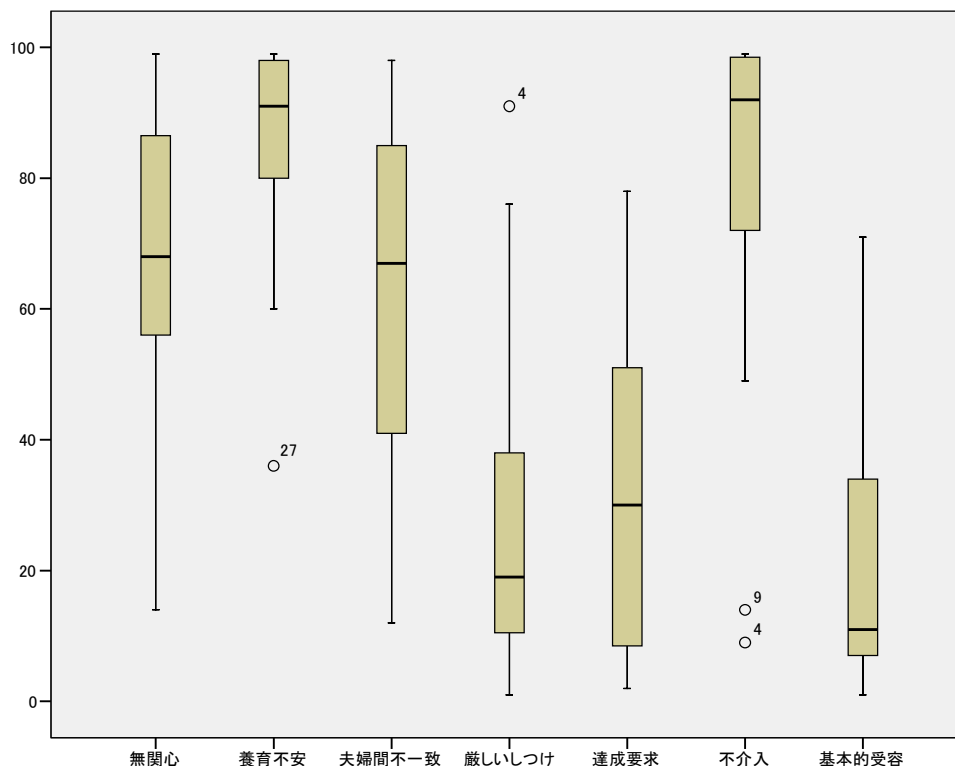


図1. 教室参加者全体でのパーセンタイル得点（教室開始時）

パーセンタイルの分布を群ごとに検討すると、「養育不安」および「不介入」の高得点ならびに「厳しいしつけ」および「基本的受容」の低得点については、両群とも同じ傾向を示している。これらは両群に共通する個性であると考えられる（図2、図3、表1）。

しかし、R群のみにおいて、「夫婦間不一致」の高得点および「達成要求」の低得点が顕著である。社会的ひきこもり者の両親は、一般集団にくらべて養育に対する夫婦間の意見が一致せず、子どもへの達成要求は低い傾向があることが示唆された。

性別によるパーセンタイル得点の分布については、対象者数が少ないため解析を行わなかった。

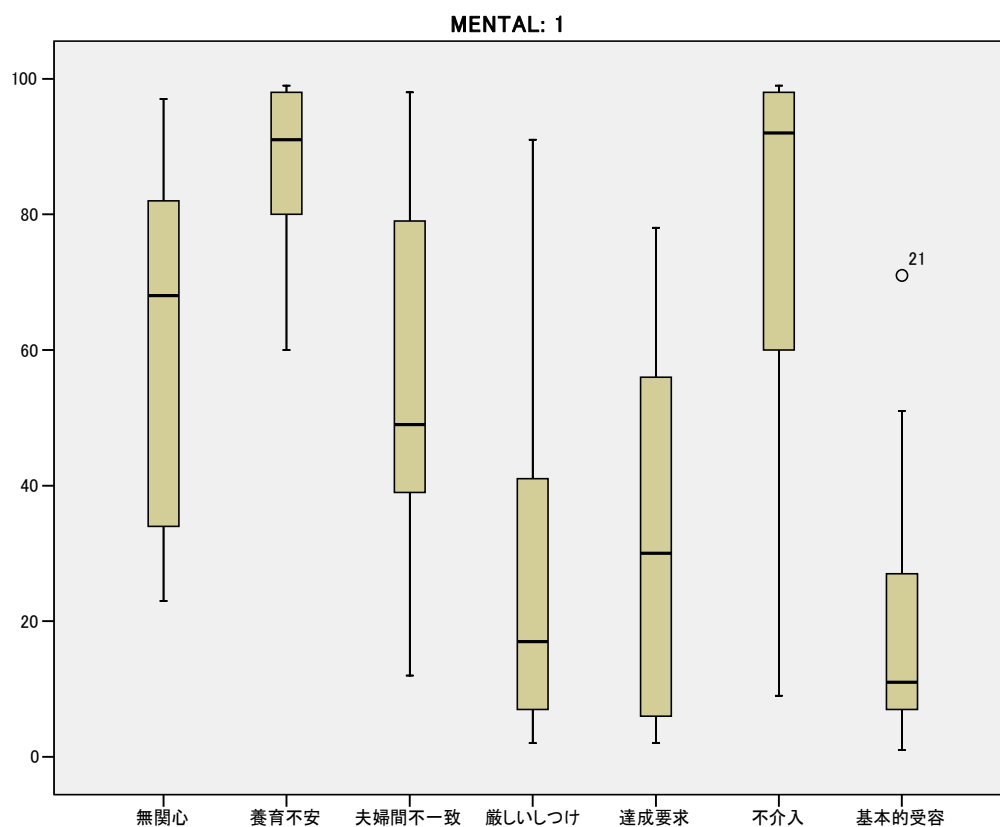


図 2. 統合失調症者両親群（S 群）でのパーセンタイル得点（教室開始時）

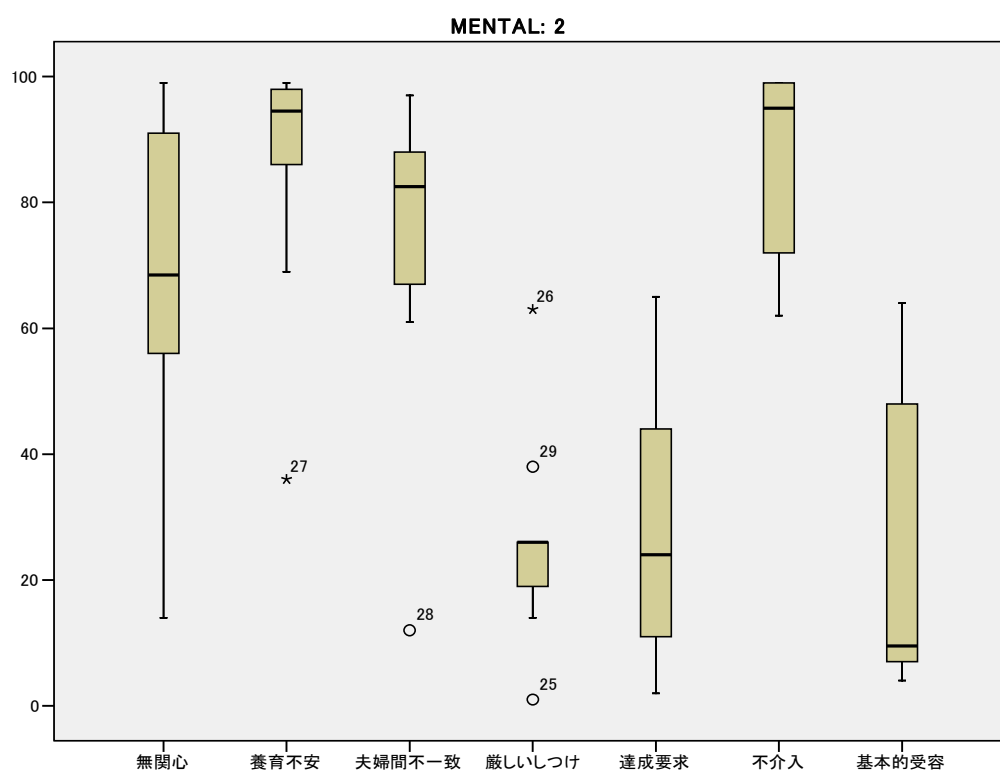


図 3. 社会的ひきこもり両親群（R 群）でのパーセンタイル得点（教室開始時）

		無関心	養育不安	夫婦間不一致	厳しいしつけ	達成要求	不介入	基本的受容
全体 (n=31)	最大値	99	99	98	91	78	99	71
	75パーセンタイル	91	98	86	38	56	99	34
	50パーセンタイル(中央値)	68	91	67	19	30	92	11
	25パーセンタイル	56	80	41	7	6	72	7
	最小値	14	36	12	1	2	9	1
統合失調症 (n=21)	最大値	97	99	98	91	78	99	71
	75パーセンタイル	86.5	98	79	41	56.5	98	30.5
	50パーセンタイル(中央値)	68	91	49	17	30	92	11
	25パーセンタイル	34	74.5	39	6.5	6	60	6.5
	最小値	23	60	12	2	2	9	1
引きこもり (n=10)	最大値	99	99	97	63	65	99	64
	75パーセンタイル	92.75	98.25	88.25	29	44.5	99	48.75
	50パーセンタイル(中央値)	68.5	94.5	82.5	26	24	95	9.5
	25パーセンタイル	56	81.75	65.5	17.75	8.75	72	7
	最小値	14	36	12	1	2	62	4

表1. 教室開始時におけるパーセンタイル得点

(2) 群間比較 (対象疾患による違い)

養育態度に関する各項目について、S 群と R 群の間で差が見られるかどうかを検定した(表 2)。7 尺度すべてについて、正確有意確率は 0.05 以上となっており、S 群と R 群とで有意な差を示す項目は見当たらなかった。本調査では対象者数が少なく、統計的検出力に限界があるため、この結果をもって「両群に差がない」とまで言うことはできない。

(3) 群内比較 (性別による違い)

養育態度に関する各項目について、各群内の属性によって差が見られるかどうかを検定した。S 群については、7 尺度すべてについて有意な男女差を認めることはできなかった(表 3)。R 群についても、家族教室の開始時および終了時ともに有意な男女差を認めることはできなかった(表 4、5)。ただし、家族教室開始時の「不介入」については正確有意確率が 0.067 と比較的小さく、対象者の少なさを考慮すれば、ひとつの傾向として注目してよいと思われる(女性のほうが不介入の得点が高い)。いずれにせよ、本調査では対象者数が少なく、統計的検出力に限界があるため、この結果をもって「両群に差がない」とまで言うことはできない。

(4) 前後比較 (家族教室の効果)

R 群における受講前後の得点変化については、7 尺度すべてについて有意な差を認めることはできなかった(表 6)。しかし、「基本的受容」については、漸近有意確率(両側)がきわめて 0.05 に近かった($p=0.051$)。統計的に有意とは言えないが、受講により「基本的受容」の得点が上昇する(=家族教室の効果が出ている)可能性が強く示唆された。一方、「無関心」、「達成要求」および「不介入」については p 値がかなり大きく、(対象数が少ないので断定的には言えないながら)受講の効果があるかどうか不透明であることが示唆された。

	無関心	養育不安	夫婦間不一致	厳しいしつけ	達成要求	不介入	基本的受容
Mann-Whitney の U	95	91	69	89	95.5	79.5	93
Wilcoxon の W	326	322	300	320	150.5	310.5	324
Z	-0.425	-0.596	-1.527	-0.680	-0.403	-1.091	-0.508
正確有意確率	0.693	0.574	0.135	0.519	0.693	0.287	0.633

表2. S群とR群の間の項目得点の差の検定

	無関心	養育不安	夫婦間不一致	厳しいしつけ	達成要求	不介入	基本的受容
Mann-Whitney の U	46	38	44.5	36	37.5	39.5	49
Wilcoxon の W	101	104	110.5	102	103.5	94.5	104
Z	-0.639	-1.207	-0.744	-1.342	-1.237	-1.101	-0.423
正確有意確率	0.557	0.251	0.468	0.197	0.223	0.282	0.705

表3. S群における男女の項目得点の差の検定

	無関心	養育不安	夫婦間不一致	厳しいしつけ	達成要求	不介入	基本的受容
Mann-Whitney の U	3	8.5	10	8	6.5	2.5	9
Wilcoxon の W	9	14.5	38	14	34.5	8.5	15
Z	-1.736	-0.459	-0.115	-0.608	-0.917	-1.887	-0.344
正確有意確率	0.117	0.667	1.000	0.667	0.383	0.067	0.833

表4. R群における男女の項目得点の差の検定 (教室開始時)

	無関心	養育不安	夫婦間不一致	厳しいしつけ	達成要求	不介入	基本的受容
Mann-Whitney の U	3	2	5	7	2	4	5
Wilcoxon の W	31	30	33	35	30	7	8
Z	-1.176	-1.495	-0.586	0.000	-1.476	-0.905	-0.588
正確有意確率	0.333	0.222	0.667	1.000	0.222	0.500	0.667

表5. R群における男女の項目得点の差の検定 (教室終了時)

	無関心	養育不安	夫婦間不一致	厳しいしつけ	達成要求	不介入	基本的受容
Z	-0.059	-0.845	-0.507	-1.194	0.000	-0.105	-1.955
漸近有意確率(両側)	0.953	0.398	0.612	0.233	1.000	0.917	0.051

表6. R群における受講前後の項目得点の差の検定

4. 考察

家族心理教育は、(1) 知識・情報、(2) 対処技能、(3) 心理的・社会的サポート、の3点を基本としてプログラムを組み立て、その結果として、(1) 正確な知識情報を得ることでスティグマや自責感を軽減、(2) 技能訓練や経験の分かち合いによる対処能力やコミュニケーション能力の増大、(3) グループ体験や新しい社会的交流による社会的孤立の防止、(4) 専門家との継続的接触による負荷の軽減、適切な危機介入、(5) 協同して治療を進めることや他の家族を援助することによる自信と自尊心の回復、を獲得することが目的としている¹⁾。

当市で主催する家族教室は、疾患や対応、社会資源などについての情報を得て、家族の不安や悩みを共有し、軽減することを目的としている。講義と共に、グループワークを取り入れ、経験の分かち合いや不安や悩みの共有、情報交換を行っている。

家族教室に参加する家族は、統合失調症、社会的ひきこもりの両親に共通する特徴として、「養育不安」「不介入」が高く、「厳しいしつけ」「基本的受容」が低い傾向であったことから、親としての不安が強く、子どもへの関わりが低く、しつけは厳しくなく、子どもを容易に受け入れることが困難であるという傾向であった。

不安感が高い傾向があることが示唆されたため、正しい情報提供や家族同士の交流により、家族の不安感を軽減した内容にしていくことが望ましい。さらに、交流を深めることで、家族同士が支えあい、自責感を軽減し、自信や自尊心を回復するような関わりが望まれる。また、「子どもとどのように関わってよいかわからない」という不安から子どもへの関わりが希薄となり、受容が困難になっているため、ロールプレイによるコミュニケーションを経験することで、実際の関わり方を身につける内容も取り入れることも検討していきたい。

社会的ひきこもり者の家族へ援助として、家族が主体となってその問題の解決に向けて動き出せるように「家族を援助すること」が第一義的な役割となる²⁾。また、家庭から出られない青年を持つ家族のモデルとして、両親間に慢性的で潜在的な葛藤が続いていること、これらを棚上げして治療に協力する姿勢を示すこと、母親は子どもとの関係を夫婦の潜在的な満たされなさを埋め合わせるものとして形成してきたこと、そして世代間境界の稀薄さと、家族の外的境界の透過性が低いこと、その結果として、家族は『橋渡し機能不全システム』を形成しているといわれる³⁾。今回の結果では、社会的ひきこもり者の両親は、「夫婦間不一致」の高得点、「達成要求」の低得点であり、養育に関する夫婦間の意見の不一致やお互いへの不満があり、子どもへの要求が低いことがわかった。やはり、家族教室における援助の視点として、夫婦間の関係性のあり方を見つめなおし、「世代間境界の確立」を中心的な課題として、家族教室の内容を構成していくことが望ましい。

社会的ひきこもりの家族教室参加後には、「基本的受容」の得点が高くなった。また、家族教室終了後のアンケートで、理解度を質問したが、統合失調症の家族教室では平均

64.1%、社会的ひきこもりの家族教室では平均 76.8%の参加者が「理解できた」と回答していた。統合失調症の家族教室では平均 88.4%の家族が、「教室の内容が今後の生活に役立つ」と回答していた。これらのことから、家族教室の参加を通して、疾患や状態の理解ができ、少なからず今後の生活の見通しができたことで、子どもへの受容ができるようになったのではないかと思われる。

5. 課題

本調査は対象者数が少ないため、統計的検出力が不足しており、差を検出することが難しい状況であった。それでも、一般集団と比べての受講者全体の傾向や受講の効果の方向性については示唆を得ることができた。

今後は、複数年度の受講者を解析するなどして解析の対象者数を増やすとともに、受講の効果がどの項目により強く出ているかにターゲットを絞って解析を行い、家族教室の広報および家族教室の運営についての参考とすることが望まれる。

6. 参考文献

- 1) 後藤雅博 編：家族教室のすすめ方 心理教育的アプローチによる家族援助の実践. 金剛出版, 1998.
- 2) 近藤直司 編著：ひきこもりケースの家族援助 相談・治療・予防. 金剛出版, 2001.
- 3) 中村伸一：家族療法の視点. 金剛出版, 1997.